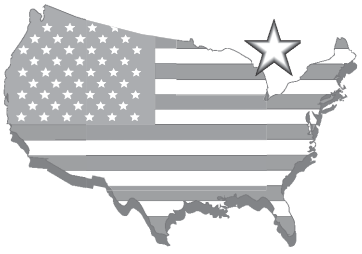
Tokyo, JAPAN

アメリカ留学自己変革記 (4)

早稲田大学政治経済学部４年
宇野　真弘



Wisconsin, U.S.A.

2008 年 9 月から 2009 年 6 月まで、大学の交換留学プログラムを利用して、ウィスコンシン州のローレンス大学に留学しています。この留学の目的は「自己変革」を起こすことです。その体験を記していきます。

こんにちは。4 月になってようやくウィスコンシンにも春がやってきました。春学期最初の週末、私は教育をテーマにしたディスカッション合宿に参加しました。これは、パスィーという教育支援財団が、全米 28 の提携大学それぞれのキャンパスで催す二泊三日の合宿です。参加者は、ローレンス大学のパスィー奨学生とその友人（78 名）、そして教授陣（14 名）の総勢約 92 名です。教育分野に興味がある私は、友人に誘われ二つ返事で参加を決めました。今回のエッセイでは、この合宿を通じて考えたことについて書きたいと思います。

1、ワークショップ

合宿を通して、「教育とは何か」を念頭にディスカッションすることが求められました。合宿の前半は、国家レベルまたは制度としての教育イシューについて話し合いました。アメリカにおける教育の歴史とアファーマティブ・アクションの是非が主題です。次に、ローレンス大学のあるアプルトンでは、収入と人種により教育を受ける機会がいまだ大きく異なる、という事実がプレゼンされます。そしてその事実を受け、ローレンス入学者選抜チームとして候補者名簿から新入生を選出するというエクササイズを行いました。それから後半に移るにつれ、自分のこれまでの経験を振り返るよう促されます。大学入学前に何を持っていて、大学生活を通じて何を失ったか。新たに得たものは何であるか。二人組みになって、これまでの教育が自分にどう影響したか（自分の考え方を変えた先生はいたか。恋人を探すのに自分の見方は変わったかなど）を話しました。そして最後は、ローレンス大学をもっとよくするにはどうしたらいいか、ローレンスでの自分の時間をどうしたらもっといいものにできるか、といったことをテーマにディスカッションしました。

2、対話の重要性

私にとっての教育とは、論理的思考力を鍛えることです。参加者によっては、専門分野の知識を深めること、リサーチの方法を身につけること、創造性を伸ばすことという意見がありました。つまり、多くの学生にとって教育とは、自分に必要なスキルを高めるものであるようです。正直に言って、「教育とは何か」ということについて、私には留学前から自分なりの考えがあり、合宿でのディスカッションからそれが大きく変わったというようなことはありませんでした。けれど教育の方法に関しては、さまざまなワークショップを通じてローレンスの教育を振り返り、日本で受けてきたものと比較するなかで、ひとつの結論に至ったことがあります。それは、人と人との対話によって、授業はより有意義なものとなるということです。

対話があるとなぜ授業が有意義なものとなるのか。そのわけは、対話がもたらす二つの利点にあります。まず、話すことで自分の理解を深めることができる点です。早稲田大学では、授業中に理解したと思っていても、実はそうではなかったことにテスト前に気づくということが、私の場合よくあります。もし授業中に対話があれば、その手順の中で自分の考えを整理する必要があり、それを通じて理解が深まると考えられます。なぜなら、友人との間で話をする場合、整理しないで話すことが多くありますが、授業中多くの人の前で話すとき、ポイントや根拠を整理してから話すことになるからです。